あごら

第一号

―あごらの会―

宗教

松下　昌義

「宗教」とは何か。多くの説明や解説があり、それぞれの立場からの見解がある。

私にとって「宗教」は、とても地味なもの、つまり日常生活の表面に目立って現れてこないけれども、私の生きる命の芯となっているものである。

「宗教」は、〝私のもの〟として騒ぎたてるものではない、と思う。「宗教」という漢字の「宗」を「こころね(根)」と読んだ学者がいる、その読み方に私は共感している。つまり、「宗教」とは「心の根っこの教え」だということだ。

これを地上に現れている植物にたとえてみるなら、「根」は地面の下深くに張っていて見えない。しかし、その根が植物を支え生かしている。それが証拠に根を切られた植物は忽ち枯れてしまう。植物にとって根は目立たないがそれを活かす芯である。幹や枝、葉や花、そこになる実、それらの目に見える部分は、目に見えない根によって支え活かされている。根が宗教の世界であるなら、地上に現れている部分はさしずめこの世の目に見える諸々のことがらである。その場合社会的な宗教現象一般もそこに含まれる。(社会的な宗教現象とは「○○宗教」「××教」の組織、教義、儀式、その結果もたらされる癒しなどの御利益現象を含めて、目に見える広い意味での一つの文化現象のことである)つまり、宗教とこの世に存在するものとの関係は、根としての

目に見えない宗教の世界が第一で、目に見える世界は第二の事として現成する世界なのである。

しかし一方、植物においては、根だけが大切なのではなく、幹や枝から生ずる葉も花も実も大切である。特に葉は大陽の光のエネルギーを利用して炭酸ガスと水から澱粉をつくる所謂光合成によって根も育てる役割をはたしていることは、一般に知られている。つまり、目に見えない根と目に見える葉との関係はそれぞれは同じではないが、同時に相補的で別なのでないということ。植物の存在についてのこの事実は、目に見えているこの世と、目に見えない世界とは別でありながら分けることは出来ないという関係にある、ということを示唆している。

「宗教」についての誤解

ときとして「宗教」は「こころの世界」のことと受け取られる。また目に見えない神や仏は聖く、目に見える世界は俗で汚れていると理解される。さらに、目に見えないものは永遠で価値があり、見えるものは儚(はかな)きもので価値無きものと教えるのが「宗教」だとされる。しかし、それは「宗教」についての誤解である。

一方、「宗教」はこの世の生活に直接利益をもたらす〝打ち出の小槌〟のように思っている人がいる。金持ちになる、立身出世をする、病気や苦難が去る等、ひたすらそれを祈願し、願いを叶えてくれるものが「宗教」だと思っている。しかし、それも「宗教」についての誤解である。

宗教は本来、目に見える世界と目に見えない世界とは、一つの命に結ばれているものだということを語る。目に見える世界に宗教があるのではない。また目に見えない世界に宗教があるのでもない。宗教は目に見える世界や目に見えない世界のすべてを超絶した大いなる命のたぎりとし

て、それらの世界を根元から抱きかかえてそれをそれとしている出来事の世界を提示している。
にもかかわらず「見える世界と見えない世界」とか「この世とあの世」、さらに「聖なる世界と俗なる世界」に分け、その一方の立場に立ち、他方を軽んずる考え方を宗教的な生き方だと思っている人が、宗教人のなかにもいる。それは根だけを重んじて幹や枝や葉や花を軽んずることと同じであり、また、幹や枝や葉や花などの利益だけに執われて根を軽んじるのに似ている。しかし、樹が生えているということは、目に見える部分と目に見えない根の部分とは同じではないが、二つは分かたずに相補性を保ち、その樹として在らしめられているのである。

宗教及び神の位置

「宗教」を問うとは、自分が生きていく本当の拠り所を問うことである。即ち自分の存在の真実の根拠を求めること、大いなる命の土台を求めるということである。そのことを一般では「神を求める」と言い、その神を信じる事を「信仰」と言っている。その意味で「宗教」の内容は神と人間との関係を問うことだと言える。また、「宗教」を問うことは自分が生きるなかでの神の位置を問うことでもある。

イエスは「天は神の玉座」であり「この世は神の足台」であると言われた。（マタイによる福音書五章三四節以下）つまり、イエスは、神は天と地に命していると言うのである。また旧約聖書の信仰人は神を次のように賛美した。

もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はその御手のわざをしめす。この日、言葉をかの日

につたえ、この夜、知識をかの夜におくる。語らず言わず、その声きこえざるにそのひびきは全地にあまねく。その言葉は地のはてにまでおよぶ。

―旧約聖書詩編一九扁―

即ち、神の命のたぎりは波動して天地におよび、すべては神の命の反映として、それぞれに相応しく存在すると言う。このような神の命のたぎる現実をヤコブは、いみじくも、次のように看破した。

愛する兄弟たちよ。思い違いをしてはいけない。あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父(神)から下って来る。父(神)には、変化とか回転の影もない。

―ヤコブの手紙一章一七節―

聖書に於いては天も地も、見えない世界も見える世界もすべて神が創造し、しつらえてくださった大いなる命のたぎる場なのである。このような神の命のたぎりから言えば、もはや、この世もあの世もない。また聖も俗も無い。有限も無限も無い。あるのは神の大いなる命のたぎりだけである。まさに神は、絶対の愛と恵みと化して天地宇宙をまる抱え、命しているのである。この神の命のたぎりの事実をヤコブは「神には回転の影もなし」と賛した。これをイエスはつぎのように語る。

父(神)は、悪人にも善人にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてく

ださる。

—マタイによる福音書五章四五節—

すべての善悪に先立って先ず〝神の命のたぎりがある〟。人間が計らう以前に神の回転の影もない絶対の愛と恵みとが、どの人の基にも来ている。だからどの人も生きていられるのだ。これこそがまさに「命の土台」なのである。

使徒パウロの場合、この神の愛と恵みなる「命の土台」を悟ったそこから、つぎのような言葉が出てくるのだ。

神がお造りになったものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはない。

—テモテへの手紙Ⅰ四章四節—

かつてパウロが身を置いていた宗教は〝律法遵守救済主義宗教〟とも言える当時のユダヤ教であった。神が与えた戒律(律法)があり、それを遵守することで神の救済にあずかるという宗教である。その場合、救いは到達点にあって、そのゴールを目指して律法(戒律)を一所懸命に守らねばならぬ自力信仰のようになっていた。パウロは、彼自身の激烈な努力によって完全遵守した。しかし、その結果得られるはずの救済の平安と喜びがなく、かえって自分の内に自負の心、傲慢の心、誇りの心、と同時に律法(戒律)を守れない者に対する軽蔑の心、侮蔑の心が生まれてくる自分を自覚することで、律法遵守救済主義宗教にひそむ〝魔〟を見たのである。と同時に、自分の内に救いがたい「罪人性」のいっそうの深まりに気づいたのである。

パウロがそれまで身を置いたユダヤ教では〝自分の熱烈な努力によって到達することで得る救い〟がイエス・キリストの福音に於いては、〝自分の努力とは関係なく、努力以前にすでに自分

が生きている現場に救済があった〃ということに開眼したのである。つまり〃出発点にすでに救済があった〃のだ。それは、自分が努力をするもしないもない。自分が救われるか滅びるかではない。自分が律法を遵守するか否かではない。自分の善悪ではない。自分の一切の計らいに先立って、すでに満ちている神の愛に包まれている自分をイエス・キリストの十字架と復活に於いて発見したのである。

人はだれでも人間として充実した人生をおくりたいと願っている。その願いを現実のものとするものは何であり、何処にあるのだろうか。この人間の問いと願いに答え得る唯一のもの、それが宗教である。しかし、その宗教は地上に現れた文化としての特定の宗教を自我が選択し、その教義を信じ、その組織に属し信徒と認められるところにあるのではない。真の宗教はその人が生きる足元にある。その人の思いに先立って、その者の命を根底から成り立たせ生死を超えて支えている大いなる命にある。だからこそイエスは言われた。

神の国(神のお恵みの統治)は、見える形で来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に神の国(神のお恵みの支配)はあなたがたの直中にあるのだ。

—ルカによる福音書一七章二一節—

また、パウロは次のように言いました。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリスト(神の命)がわたしの内に生きておられるのです。

—ガラテヤの信徒への手紙二章三〇節—

私がイエスから受け、パウロから示された宗教と神を語るなら以上のとおりである。

(本文は、『みちしるべ誌』二〇九号(左京教会発行)「人生と宗教」からの転載です)

あとがき

松下　昌義

世話係りの小野恵子姉より依頼があり、「あとがき」を少し記させていただきます。

この度「あごら誌」に、多くの教友の原稿が寄せられ、お一人お一人のそれをとても興味深く拝見しました。また、過去四回の「あごらの会」に参加させていただき、共に学び、語り合った方々のお話しと、この度の原稿とを重ねて私の感想を述べることで「あとがき」といたします。

それにいたしましても、十九世紀は、キリスト教にとって伝道の世紀でした。「半世紀のうちに世界はキリスト教化されるだろう」と思われたほどに、当時は欧米諸国の植民地政策に支えられてキリスト教会は世界伝道に大いなる成果をあげました。しかし、二十世紀に入ると第一次世界大戦、続く第二次世界大戦に代表される、人が人を殺す悲惨な戦い、また、キリスト者同志の殺戮という余りにも凄惨な戦争の現実に人々は直面し、又、聖書の批判的研究の進歩や高度な科学技術の発達、加えて、世俗化という事態の蔓延等により、神の存在への疑義としての問いを誰もが持つようになりました。その結果、人間が生きる存在の基盤としてのキリスト教の信仰がぐらつき、存在の支えを失った虚無感が生まれてきました。これが二十世紀の歴史的現実だったの

です。その意味で、二十世紀とはキリスト者が、みずからの信仰の根拠と本質を反省する世紀であったと言えます。

これらのことは単に欧米に於けるキリスト者だけのことではなく、広く世界の、そして日本のキリスト者達の置かれている状況であり、それは、改めて神を問わざるを得ない求道の苦悩の始まりでした。この問題意識を自分の身に引き受けて、確かな信仰の基盤、即ち真剣に神を問う求道をとおして、二十一世紀に於けるキリスト教信仰の在り方を模索した神学者達がおり、現在もその努力がなされています。しかし、このような苦悩は、ただ神学者だけにとどまらず、宣教の第一線で働く教会の牧師、または信徒の方々において、その切り口は異なっても、同じ現実に直面し、従来のキリスト教信仰の在り方、キリスト教会の在り方などに疑義を、または問いを持ちつつ伝道や求道の日々を過ごしておいでになる方が少なからずおられます。勿論、このような歴史的現実を認めず、未だに十九世紀的なキリスト教会の在り方を固守している牧師や信徒の方々が多くいらっしゃることも事実です。

この度の「あごらの会」での学びと語り合いに於いて、また「あごら誌」を拝見して気づくことは、その生かされている場は異なっても、いずれの教友も、今日のキリスト教や教会が置かれている歴史的な現実がもたらす状況の中で、キリスト者として生かされる信仰の確かな根拠を苦悩の内に、真摯に求めておいでになるということです。

従来、キリスト教会は、キリスト者の言動を、教会が保持する伝統的な教義に基づく聖書理解

に照らして、正統的か異端的かという判断をなし、信徒を断罪して来ました。その作業は極めて教条的で安易な適応であり、且つ合理的、機械的対応、さらに独善的なものとなってしまっています。それは教条主義による判断停止という状況だと言えます。それは正にイエス当時のパリサイ的律法主義体制の崩壊寸前の姿のようです。

一方、今日のキリスト教会の聖書的宣教の言葉は、先述の如く単なる形式的な言葉（メタ言語）となり、人のこころの芯に訴える言葉であるはずの「聖書の命の言葉」が、その命の欠落の故にただ虚しい正統的教義に支えられた単なる言葉になり果ててしまいました。したがって、キリスト教会への現代人の根源的な批判的問いかけに十分な答えが出来ず、かつ説得的な答えを与える事が出来なくなっていると言えます。

聖書は本来、人を人として有るべき姿に活き活きと生かす命の言葉であります。そのような命の言葉に出会い、さまざまな苦労と困難、矛盾と不条理、利己的な利害得失、更に、からからに乾いた合理主義の世の中にあっても、確かな希望と喜びとを持ち、愛を捨てずに生きて行こう、生きて行ける、生きて行くのだ、という本当に人を活かす命を自らの心の芯に注ぎ込むのが聖書です。その意味で聖書は命の言葉なのです。

「あごらの会」に集った教友たちは、そのような命の言葉を本当に聖書からいただく事を願って、それぞれの現場で求道している真摯な方々だとお見受けしています。

自由に闊達にどのような枠にも囚われず、自らの求道の思いのありったけを素直に語り、霊的

な祝福に豊かに与かる「あごら」となりますようにお祈りいたします。